



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	北海道大学北方生物圏フィールド科学センター植物園における来園者層調査報告
Author(s)	長野, 純子
Citation	北大植物園研究紀要, 2, 37-58
Issue Date	2002-03
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/32810
Type	departmental bulletin paper
File Information	2_p37-58.pdf



北海道大学北方生物圏フィールド科学センター植物園

における来園者層調査報告

長野 純子

本報告は、平成13年度北海道大学北方生物圏フィールド科学センター植物園（以下北大植物園と記す）の夏季開園期間に実施した来園者層調査の結果を報告するものである。なお前年度の夏季開園期間中に、同園内の北方民族資料室において加藤らによる来園者層調査¹がすでに行われているが、本報告は調査場所を同園温室ホールに変更しての継続調査である。

1. 目的

北大植物園では4月29日（みどりの日）から11月3日（文化の日）までを夏季開園期間として、屋外の庭園部のほかに園内に存する博物館、北方民族資料室、宮部金吾記念館および植物園温室を広く一般に開放している。前年度の調査では北方民族資料室前にて今回と同様のアンケート調査を行ったが、回答率が来園者数の約4%と低く来園者全体の意見を反映しているとはいいきれなかった。そこで今年度は調査場所を植物園温室1Fホール（以下温室ホールと記す）に変更して同期間中に同様の調査を行った。今年度の調査場所である温室ホールは温室内に設けられた約20席のスペースで、休憩用テーブル（5台²）とイス（20脚²）のほか、手洗い（男女別と車いす用）および水飲み場を備えている。また温室ホール入り口には園内唯一の清涼飲料水の自動販売機が設置されており、広い園内を歩き回った来園者にとっての一服の場として、また悪天候時の雨よけの場として、あるいは肌寒い春早くや秋の終わりに暖をとる場として多くの来園者に利用されている。一般に公開されている上記の4つの施設のうち、このような「休憩場」としての機能を持つのは温室のみである。以上のことから、来園者の動向を調査するにあたって温室ホールが適当な場所であると判断した。

本調査の目的として、第一に北大植物園を訪れる来園者層の傾向およびその動向を把握することで、植物園および博物館における一般の来園・来館者向けの展示および解説を検討するうえでのデータ資料とすること。第二に前年度と調査場所を変更することで、アンケートの設置場所がその結果に与える影響を調査すること。第三に毎年実施されている4月29日の無料開放に加えて、今年度は北海道大学創立125周年記念特別事業として行われた9月30日の無料開放において、一般有料開園日と比較した際に来園者層に与える影響の有無を調査することの三点をあげる。

2. 調査方法

〈調査場所〉北大植物園 温室1Fホール

〈調査期間〉平成13年4月29日～11月3日（植物園夏季開園期間）

＊休園日：毎週月曜日（月曜が祝日の場合は翌日）

〈調査対象〉北大植物園への一般来園者

〈調査方法〉温室ホールに置かれた来園者休憩用の各テーブルにアンケート用紙を設置し、来園者の自由意志に任せて記入してもらう。

〈調査項目〉加藤らの報告¹に準じて、性別・年齢層・居住地・来園回数・来園目的の5項目について調査した。
（参考資料1）

〈調査における問題点〉

集計上の問題として、回答者一人に対して一行の回答欄を作成し記入上注意するように注釈を付け

て促したが、家族連れなどが一行に複数名分の回答をしていることがたびたび見受けられた。可能な限りデータを吸い上げるべく、加藤らの報告¹⁾に準じて集計操作を行ったため、『不明』の数値が増えている部分がある。なお、集計操作は次のように行った。

資料1 アンケート用紙への回答の一例

日付	性別		年齢				
	男性	女性	～10	11～18	19～25	26～40	41～60
	○	○		○		○	○

この回答例の場合、集計数は下記のようになる。

性別：男性＝1名、女性＝1名、不明＝1名

年齢：11～18歳＝1名、26～40歳＝1名、41～60歳＝1名

3. 調査結果および考察

(1) 来園者数と回答者数

表1 来園者数と回答数(平成13年度 温室)

調査日数	来園者数	回答者数	回答率(%)
4月	2 (1)	4,369 (3,604)	355 (206)
5月	26	15,964	1,910
6月	26	14,618	1,683
7月	26	10,768	1,364
8月	27	13,323	1,916
9月	26 (1)	11,084 (1,380)	1,535 (140)
10月	26	8,167	1,110
11月	3	585	70
総計	162	78,878 (4,984)	9,943 (346)

*カッコ内は、無料開園日のデータを内数で示す。

来園者の数に対する回答者の数は、調査月別にみても約1割に達した(表1)。ゆえに来園者のおおよそ10人に1人がアンケートに回答したといえる。調査場所には前述の理由から多くの来園者に利用されている温室ホールを選んだが、植物園来園者全体の動向を正確に反映する調査場所とはいえない。その理由として次の三点が考えられる。まず北大植物園の温室は別個の育成温室を持たないため、大部分が展示と育成を兼ねたスペースとして活用されており、加えて栽培および観賞するにあたってのメリットから地植えで管理している植物も多数あるために、大規模な展示替えが頻繁に行われているわけではない。このため以前訪れたことのある人は、調査場所である温室に足を運ばない可能性が考えられる。次に屋外の庭園部分や博物館、北方民族資料室を目的として訪れ、温室を見学しなかった来園者の意見が反映されていない可能性があると同時に、温室を目的に訪れた来園者の意見が実際よりも大きく反映されている可能性が考えられる。第三に温室を訪れた来園者であっても、ホールに設けられた休憩用テーブルを利用しなければアンケート用紙が目に入らないことが予想され、温室ホールで休憩を取らずに退園した来園者の回答は得られなかった可能性が考えられる。

なお、表からも読みとれるように5月から10月までのデータは、約26日間の開園日から得られたもので一ヶ月間の傾向を正確に表しているといえるが、4月は29日(無料開園日)と30日の2日間のデータ、

11月は1日から3日までの3日間のデータからなっているため、これだけでは一ヶ月間の傾向を表しているとは言い難い。よってこの二月においては、他の月と比較するには不向きなデータであることを念頭に置いていただきたい。しかしあえてこのような手法を用いたのは、来園者の動向を月別変動として傾向を捉えたうえで比較の方が理解しやすいであろうと判断し、こちらに重点を置いたことによる。

(2) 男女比

来園者に占める男性と女性の割合は、女性が5割以上となり男性を上回った（図1）。開園期間を通して月別にみると全体としてやや女性が多いという傾向がみられた（図2）。特に4月5月に女性の割合は高く、男性の割合が女性を上回ったのは11月だけである。

次に無料開園日（4/29と9/30の2日間）と、一般有料開園日からなる各月の平均との間で男女比を比較した（図3）。この結果、無料開園日においては一般有料開園日と比較して女性の比率がやや高くなるという傾向が見られたが、統計的な差としては表れなかった。

(3) 年齢構成

資料2 調査に用いた年齢区分

（層）	年齢(才)	対象
A	～10	小学生(中学年まで)
B	11～18	小学生(高学年)、中学生、高校生
C	19～25	短大および大学生
D	26～40	社会人(学校に通う子供のいない年齢層を想定)
E	41～60	社会人(学校に通う子供のいる年齢層を想定)
F	61～	熟年(子供が独立する年齢層を想定)

年齢区分は加藤らの報告¹⁾に準じて次のように区分した（資料2）。これは、植物園が観光スポットとしての役割を果たしていると仮定し、そうであれば来園者の動向が学校や一般企業等の休暇時期に顕著に表れると考えられるので、休暇時期が共通となるような年齢区分を設定したものである。

集計の結果、来園者の中心は41～60歳のE層で35%前後、次いで26～40歳のD層が20%前後、そして僅差で60歳以上のF層が続いた（図4）。

調査年齢別における月別変動の傾向は、次のようである（図5）。

- A層 …… 4月5月、7月8月において増加傾向が見られる。なかでも8月は最も高く8%を越える。そのほかの月では5%を切り、11月に0%となりデータに表れてこなかった。
- B層 …… 5月6月と8月および10月で8%を越えている。なかでも8月は最も高く15%を記録する。そのほかの月は7%前後で推移し、最低値は11月に約4%を記録している。
- C層 …… 4月に最低値7%でスタートして7月までは10%未満で推移するが、8月を境に上昇する。なかでも9月は最も高く約17%に達する。
- D層 …… 7月と9月および10月11月において20%を越える。なかでも9月が最も高く約23%に達する。4月から6月および8月はやや低く、最低値は6月の約14%であった。
- E層 …… 4月は約40%と高い値でスタートするが、5月6月は減少傾向となり、7月に入ってやや回復するものの続く8月から10月にさらに減少する。しかし11月に急上昇し50%を越える。
- F層 …… 4月から6月に増加傾向が見られ、なかでも6月は最も高く25%に達する。7月を境に減少し、9月10月にやや回復するものの11月には最低値の10%となる。

4月にA層がやや多いのは、無料開園日である4月29日に家族連れで来園したケースが想定される。

ここで最も注目したいのは8月である。この期間ではA、B、C層全てにおいて平均より高い値を記録している。7月末から8月にかけての夏休みが主な要因であろう。これに対して夏休みに幅のある大学生、若い社会人を含むC層、D層は9月にピークを迎えている。

61歳以上のF層は時間にゆとりのあるためか、学生で混雑するであろう夏休みを避けるよう来園していることが読みとれる。また秋に入ってからピークはおそらく紅葉目的であろう。

次に無料開園日と、一般有料開園日からなる各月の平均との間で年齢構成を比較した(図6)。その結果、61歳以上の世代で無料開園日に多く来園している傾向が見られたが、統計的な差としては表れなかった。

(4) 居住地構成

来園者のうち50%以上が道外から訪れた人であることが明確に表れた(図7)。旅行者と考えられる道内と道外および海外からの来園者は70%以上となり、札幌市民による利用は30%以下にとどまった。

それぞれの回答における月別変動の傾向は、次のようである(図8)。

- 市内 …… 4月に60%を超える最高値を記録するが、その数は徐々に減少し7月8月においては20%を割り込む。9月10月にかけてやや回復傾向を見せるが11月に最低値を記録している。
- 道内 …… 4月から6月にかけては15%を超えた値を維持するが、7月以降は10%をやや上回る値で推移する。
- 道外 …… 4月に最低値20%からスタートするが徐々に増加し7月から9月および11月では60%を超えている。市内データとは、相反した変動をしていることが伺える。
- 海外 …… 調査期間を通して3%前後で推移するが、7月だけは約6%と倍増している。

道外からの来園者が7月から9月で増加している理由として、この時期が夏休み期間中であることがあげられる。避暑目的の北海道旅行、あるいは小・中学生にとっては自由研究といった要因が考えられる。しかし道内からの来園者は、道外からの来園者に相反するようにこの時期に低迷している。道内に住む人にとって植物園は長期休暇を利用して訪れるというよりも、5月がピークとなっていることからゴールデンウィークのような短中期休暇を利用して訪れるケースが多いようである。また海外からの来園者は7月がピークとなっていることから、道外と同様に夏休みを利用して訪れるケースが多いといえる。

次に、無料開園日と一般有料開園日からなる各月の平均との間で、居住地構成を比較した(図9)。その結果、市内からの来園者は無料開園日に特に多く、その数は約7割に達した。これは一般有料開園日の3倍近い値である。この無料開園日と一般有料開園日との間において、統計的な手法に基づいた平均値の差の検定(以下t検定と記す)を行った結果、1%水準で有意であった。この一方で、道外からの来園者は一般有料開園日に多く、一般開園日と無料開園日との差は5%水準で有意であった。よって無料開園日における来園者の大半は札幌市民であり、これに対して一般有料開園日では道外からの来園者が多くを占めているといえる。4月に市内からの来園者が6割を越えているのは、4月29日(みどりの日)の無料開園日の影響といえよう。4月29日を無料開園日に制定してから今年度で13年が経過しているが、このことは札幌市民に広く浸透しているようである。市民にとって、当園に足を運ぶ良い機会になっているといえよう。加えて今年度は北海道大学創立125周年記念ということで、特別に9月30日を無料開放とした。みどりの日のような定着した無料開園日には無いにもかかわらず、この日も多くの札幌市民に利用されたことがデータから読みとれる。

(5) 来園目的

複数回答であるため回答者数に対する各項目の割合となっている。全体の約70%が植物園、約60%が観光、博物館、北方民族資料室がそれぞれ約20%という結果となった(図10)。

それぞれの回答における月別変動の傾向は、次のようである(図11)。

- 観光 …… 4月に約26%と最低値から始まり5月から7月は徐々に上昇し続けて、8月には約67%に

達する。9月10月はやや減少するものの50%以上を維持しながら11月に最高値約69%を記録する。

植物園 …… 4月に最高値80%からスタートし、その後徐々に減少傾向となる。8月に60%を割るもののそれ以降は60%以上を維持しながら推移する。

博物館 …… 各月を通して特に大きな変動は見られず、20%前後を維持しながら推移している。

北方民族資料室 …… 9月を中心とした緩やかなピークが読みとれるが、全体を通して17%前後で安定している。

次に無料開園日と、一般有料開園日からなる各月の平均との間で来園目的を比較した(図12)。その結果、観光を目的に来園する人は一般開園日に多く見られ、無料開園日との間でt検定を行った結果、5%水準で有意であった。無料開園日では観光よりも、植物園、博物館を目的とする人が多く見られた。よって無料開園日に来園する人の多くは、観光とは別の目的で来園しているといえるだろう。4月に観光目的との回答が最低となったのは、4月29日の無料開園日の影響であると考えられる。このほか博物館を目的とする人が9月30日に多く見られる要因として、北海道大学創立125周年を記念した特別展示が博物館にて開かれたことがあげられる。

(6)来園回数

来園回数を調査することで、来園者にとって当園がどのような形で利用されているかを把握することができる。来園回数が多いと答える回答者は、こまめに足を運んでくれる反復利用者(リピーター)といえるだろう。植物園には当然のことだが四季があり、季節によって植物の姿は変化している。春に花見に来た人が、秋には紅葉を目的に再び来園する可能性は少なくはないであろう。これは、生きた標本を公開展示の主とする植物園特有の性質といえるかもしれない。結果として、来園回数が1回(初めて)と回答した人は約65%、これに対して2回目以上と回答した人は約30%となった(図13)。

それぞれの回答における月別変動の傾向は、次のようである(図14)。

来園回数1回 …… 4月に約40%と最低値から始まり5月6月は徐々に上昇するものの60%を下回っている。しかし、7月に入ると途端に70%を超え8月でピークとなる。その後9月から減少に転じるものの、60%以上を保ちながら10月11月をむかえている。

2～5回目 …… 4月に30%を越える最高値から始まり、5月6月は減少しながらも、20%は保って推移する。しかし7月にはいると20%を下回って8月には最低値となり、9月から11月までは上昇に転じるものの20%程度で推移する。

6～10回 …… 4月をピークにして徐々に減少して、6月から11月は大きな変化は見られず、5%および11回以上 前後を維持し続けた。

月別変動の傾向から「来園回数」が『1回』と回答した来園者と、「居住地構成」での『道外』、および「来園目的」での『観光』と回答した来園者、この三つの変動はよく似た傾向を示していることがわかる。このことから、来園回数『1回』と回答した人の多くは『観光』を目的としており、またその多くは『道外』からの来園者であることが予想される。「道外」から「観光目的」で「初めて来園する」という三点については、関連しているといえよう。

次に来園回数に関して一般有料開園日と、無料開園日とで比較してみた(図15)。一般有料開園日においては、分布のピークが1回(初めて)に集中し2回以上との間に大きな差が生じているのに対して、無料開園日では分布のピークが1回および2～5回と幅が広く、加えて6～10回および11回以上でも一般有料開園日より高い値を保っている。特に4月29日においては、2～5回から11回以上までのそれぞれの回答において10%を越えている。また一般有料開園中の月別の変動と、無料開園日との間でt検定を行った結果、2～5回との回答において1%水準で有意差がみられた。これらのことから無料開園日には、一般有料開園日と比較して来園経験の豊かなリピーターが数多く訪れるという特徴が示唆される。

ここで一つ気になるのは、回答に占める『不明』の割合である。今回設けた5問のうち、問4を除く4設

問において設問の性質上『不明』の項目が生じた。この多くは記入漏れと考えられ、ほかの設問には回答しているにもかかわらず、ある設問だけ空欄になっているという場合である。このほか数としてはわずかではあるが、読むことが非常に困難な記入や、集計する際に判断しかねる記入の場合もここに含めた。今回の調査において、来園回数を問う設問の『不明』の回答は、性別、年齢構成、居住地構成の3設問から集計された『不明』の回答と比較して、高い値を示していることが読みとれる。来園回数を問う設問のみ空欄が多い、すなわち回答率が低いのである（表2）。

表2 各設問において集計された不明回答率(%)

Date	性別	年齢	居住地	来園回数
4月	1.41	1.13	0.56	5.35
5月	1.41	0.63	0.84	4.45
6月	1.43	3.15	3.45	9.51
7月	0.59	0.88	1.83	4.69
8月	0.94	1.30	1.30	4.33
9月	0.46	0.85	1.56	4.63
10月	1.35	1.08	2.25	5.68
11月	1.43	0.00	0.00	4.29
平均	1.13	1.13	1.48	5.37

来園回数の『不明』の回答と、ほか3問それぞれの『不明』の回答との間でt検定を行った結果、全ての設問間において1%の有意差が見られた。統計的に見ても来園回数を問う設問における『不明』の回答は、ほかの設問に比べて高いといえる。では、なぜ来園回数の設問にだけこのような結果が表れたのであろうか。次の3点が考えられる。

まず、この設問が第5問目に位置していることである。来園者の主たる目的は見学であり、アンケートに回答することは自由意志である。記入する人にとっての負担を考慮した場合、設問数は4問程度が限界なのではないだろうか。多すぎる設問数は回答する人にとって大きな負担となりうるであろう。また記入に長い時間を要するため、はじめから敬遠される可能性や、回答を途中で放棄される可能性もありうる。さらにこのような負担がデータに反映すれば、「不明」の回答が増えるばかりで正確なデータとはいいきれなくなるだろう。任意回答という形式で、回答意欲をできるだけ損ねずに多くの正確なデータを集めるには、設問をできるだけ絞り4問以内に押さえた方が良いのではないだろうか。

次に設問の内容に関して、回答区分に1回、2～5回、6～10回、11回以上の4択に分けた点である。ここで来園経験のある人が回答したと想定しよう。『2～5回』と回答した人は「何回か以前に来たことがある」という意識で、『11回以上』と回答した人は「よく来る」という意識から迷うことなく記入できるだろう。では『6～10回』と回答した人は、どのような意識で回答したであろうか。仮に、自分が良く足を運ぶラーメン屋があったとしよう。そこで自分がこのラーメン屋に来るのは10回目なのか、あるいは11回目かを正確に認識している人はどの程度いるのだろうか。おそらく、ごく僅かであろう。ゆえにこの設問は答える側にとって、特に10回前後の来園経験を持つ人にとって、非常に回答しづらく、その結果として空欄として残され、『不明』の回答につながったのではないだろうか。では設問を作成した側は、6～10回の層をどのような意図で設けたのであろうか。そもそもなぜ選択肢を4つも設けて細かく区分したのか、具体的な理由が見あたらない。であれば4択を3択にすることで、回答率の改善は期待できないだろうか。一例として、1回目（初めて）、2～5回目（何度か来たことがある）、6回以上（よく来る）の3区分である。3択にすることで回答率が上がれば、データはより正確なものになるだろう。

そして第三に、選択肢の設定についてである。資料からおわかりように設問の形体は「いままでの来園回

数」との設問に対し、1、2～5、6～10、11～と選択肢が並んでおり、それぞれ該当する所に○を記入する形式である。作成側としては、『1（回目）』＝初来園との意図で、“First time”との英訳もつけていた。しかし、この欄に「初めて」とあえて文字で記入されているケースが何度か見受けられた。このように記入した人にとっては、初来園＝「いままでの来園回数」は0回、と解釈したようだ。確かに作成した側の意図とは異なるが、間違った解釈ともいえない。また今回が2度目の来園となる人にとって、同様の解釈をすれば2度目＝「いままでの来園回数」は1回となり、実際は2～5回目に該当するにもかかわらず『1回』と回答したケースも想定される。ゆえにこの設問は、2通りの解釈が可能な選択肢であったために、誤解が生じていたのではなかろうか。回答者が設問の解釈に戸惑い、最終的に空欄にした、あるいはこちらの意図とは異なる回答を記入した可能性が考えられる。ならば選択肢の『1』を『初めて』に変更することで、このような誤解を解消することできないだろうか。

上記のような問5の作成におけるいくつかの問題点も、今後のアンケート調査において何らかの参考になれば幸いである。

(7)前年度調査結果との比較

前年度の北方民族資料室前を調査場所とした結果と、今年度の結果とを回答率で比較した（表3）。

表3 平成12年度および13年度の来園者数と回答数

	調査日数		来園者数		回答者数		回答率(%)	
	H12	H13	H12	H13	H12	H13	H12	H13
4月	2 (1)	2 (1)	2,368 (1,576)	4,369 (3,604)	82 (32)	355 (206)	3.46 (2.03)	3.46 (2.03)
5月	26	26	15,578	15,964	528	1,910	3.39	0.18
6月	26	26	15,666	14,618	530	1,683	3.38	0.20
7月	26	26	13,321	10,768	509	1,364	3.82	0.28
8月	27	27	14,273	13,323	613	1,916	4.29	0.22
9月	26	26 (1)	9,995	11,084 (1,380)	454	1,535 (140)	4.54	13.85 (10.14)
10月	26	26	9,724	8,167	400	1,110	4.11	0.37
11月	3	3	976	585	35	70	3.59	5.12
総計	162	162(2)	79,533	78,878 (4,984)	3,069	9,943 (346)	3.86	12.61 (6.94)

来園者数に対する回答率は、前年度と比較して約3倍以上と大幅に伸びていることがわかる。ゆえに今回のアンケートを設置した温室ホールは、前年度の北方民族資料室前よりもデータ数を増やすという点では適しているといえる³⁾。

まず男女比のグラフ（図16）では、今年度において女性の割合がやや増加していることが読みとれる。

次に来園目的のグラフ（図19）に注目したい。来園目的を『植物園』と回答した人は前年度と比較して今年度は大きく伸びている。これに対して、『（北方民族）資料室』と回答した人は前年度と比較して大きく低下している。このことから、前年度の調査場所が北方民族資料室前であったこと、今年度の調査場所が温室ホールであったことが来館目的に大きく反映しているといえる。

続いて居住地構成のグラフ（図18）に注目したい。今年度に比べて前年度の『道外』および『海外』の割合が大きく出ていることが読みとれる。これは北方民族資料室が、北海道の先住民族（アイヌ・ウィルタなど）の生活文化資料を公開保存している場所であり、温室と比較した場合、北海道の先住民族に関心の高い道外、海外からの観光客らに多く利用されている施設といえる。このことは、来館回数のグラフ（図20）において、『道外』および『海外』の回答者と相関があると予想されている「来館回数」の問に対する『1回（初めて）』の回答割合が、今年度に比べて前年度に多く出ていることによっても裏付けられる。

また年齢構成のグラフ（図17）に着目すると、61歳以上の世代が属するF層が前年度に比べて今年度は大きく伸び、11歳から40歳までが属するB、C、D層がやや減少していることが読みとれる。一因として、61歳以上の世代において北海道の先住民族に関心が低い、もしくは以前に訪れたことがあるため足を運ばなかった可能性が考えられる。このほかの要因として園内にある4施設のうち、北方資料室だけが2階に位置していることが考えられる。この施設を利用するには、ほかの施設と異なり階段を利用しなければ見学することが出来ない。この階段の利用が61歳以上の来園者の足を遠ざけているのではないだろうか。

一方B、C、D層の減少に着目してみると、特にB、C層が小・中・高・大学生および短大生を含むことから、温室に比べて北方民族資料室が、修学旅行や学校研修等で訪れる学生に利用される機会が多いという可能性も考えられる。

このようにアンケートを設置する施設が持ちあわせる性質の差が、調査結果に何らかの影響を与えていることは分かった。しかし実際に調査場所の性質が、その結果にどのような影響を与えるかを具体的に解明するには、北方民族資料室での利用調査を中心としたさらなる継続調査が必要であるといえる。

また、この結果は調査場所の違いだけではなく、今年度は北海道大学創立125周年記念事業が行われたことで無料開園日が2日間あったことも影響している可能性がある。前述のように、無料開園日には札幌市民による利用が多く、リピーターが増加する傾向がある。加えて、これだけ道外からの来園者が多い施設であることから、不景気による北海道観光客数の落ち込みが影響している可能性も考えられる。このように調査場所以外の様々な要因が絡んでいることから、単純に比較して結論づけることは妥当ではない。しかし同様の調査を数年間続けることで、変化する来園者層とその要因とをより正確に把握することができるだろう。

前年度および今年度における調査では、回収されたアンケート結果を月単位で集計を行っていた。これを週または日単位に区分した上で集計を行えば、より細かい期間の中で変動する来園者層の動向を把握することができるだろう。また、道外からの来園者に多く利用されている施設であれば、来園者層と北海道を訪れる観光客の入り込み状況との間に相関がある可能性も十分に考えられる。

最後に、本園を訪れる多くの人々にとって、理解しやすく、かつ北大植物園が研究植物園であり、大学の教育施設であることが伝わる展示、および解説の作成と検討に、このデータが生かされることを期待する。

4. 要約

平成13年度北大植物園の夏季開園期間に、性別・年齢層・居住地・来園回数・来園目的の5項目を来園者の自由意志に任せて記入してもらう来園者層調査アンケートを実施した。この結果、男女構成では男性よりも女性の割合が高く表れた。年齢構成では、40歳から60歳までの世代に最も多く利用されており、居住地構成では道外からの来園者が多いという傾向が明らかになった。来園者の目的は「植物園」次いで「観光」との回答が多く、来園回数を問う設問には「初めて訪れた」との回答が多かった。居住地構成において「道外」と回答する来園者と、来園目的で「観光」と回答する来園者、および来園回数が「初めて」と回答する来園者の間には相関があることが示唆された。

前年度の加藤らによる同様のデータ¹⁾と比較して、調査場所の違いが来園目的の回答割合に大きく反映していることが明らかになった。

4月29日および9月30日の無料開園日には一般有料開園日と比較して、何度か来園経験のある札幌市内に在住する人が、観光以外の目的で来園する傾向が明らかになった。また来園回数を尋ねる問5の設問に、検討の必要性があった。

1：加藤克・長野純子 北海道大学農学部附属植物園・博物館の来園者層調査報告と展示評価（『北海道大学農学部博物館研究紀要』第1号、2001年）

2：温室ホールでの備品等の配置替えにより、この数は多少前後することがある。

3：調査方法で触れているように、全ての来園者の傾向を反映させた正確なデータを取るという点においては、いくつかの問題がある。

<参考資料1>

1行に一人分を記入してください。Please write your answer in one line.

	性別 (1つに○)		年齢		居住地			目的 (複数回答可)				いままでの来館回数								
	日付	Sex (Choose one) 男性 Male 女性 Female	~10	11-18	19-25	26-40	41-60	61~	市内	道内	海外	観光 Sightseeing	植物園 Botanic Garden	博物館 Museum	民族資料室 Ainu Museum	その他 Others	1 First time	2~5	6~10	11~
例	4/23																			
1																				
2																				
3																				
4																				

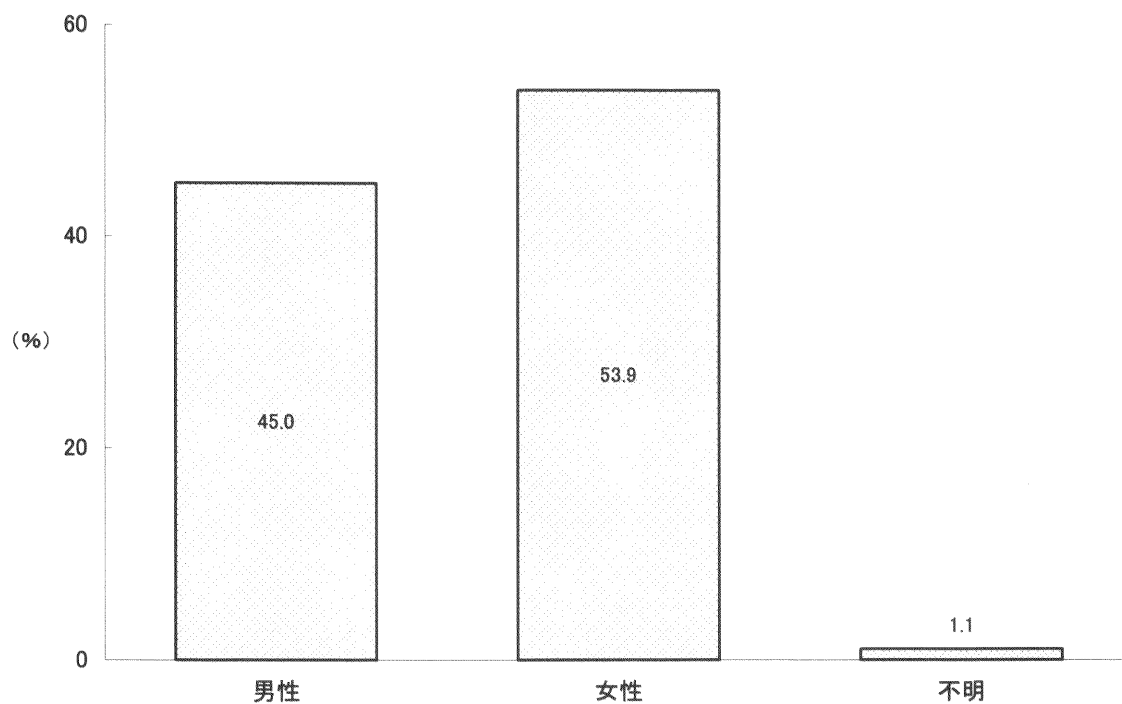


図1 男女比

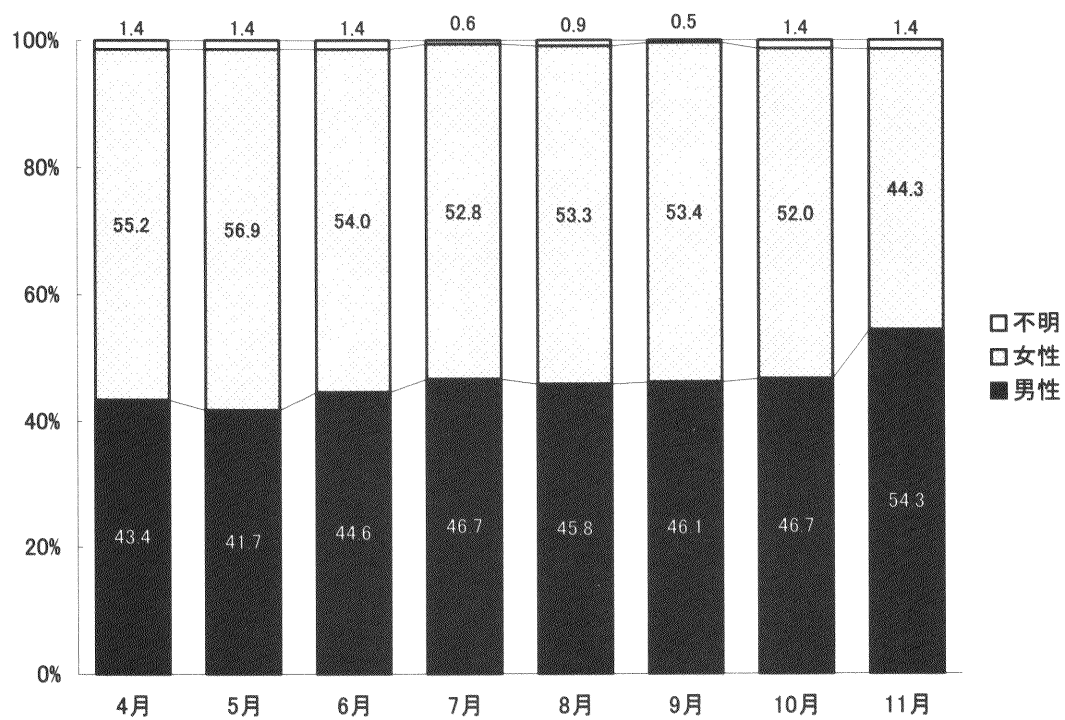


図2 月別男女比

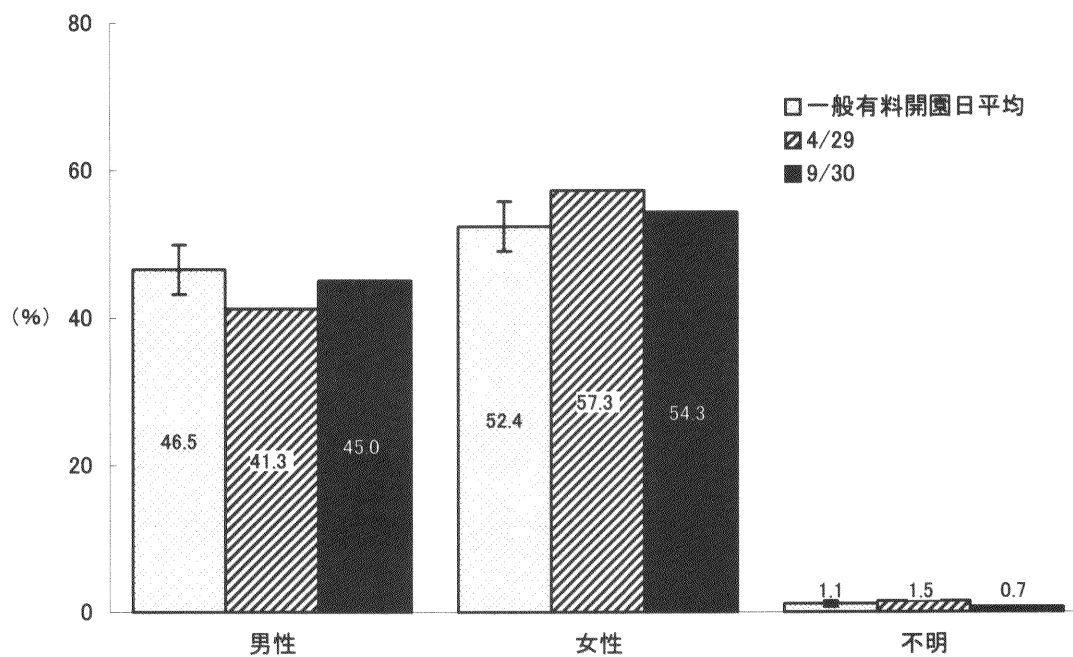


図3 無料開園日における男女比

注：一般有料開園日平均におけるバーは各月の変動範囲を表す。

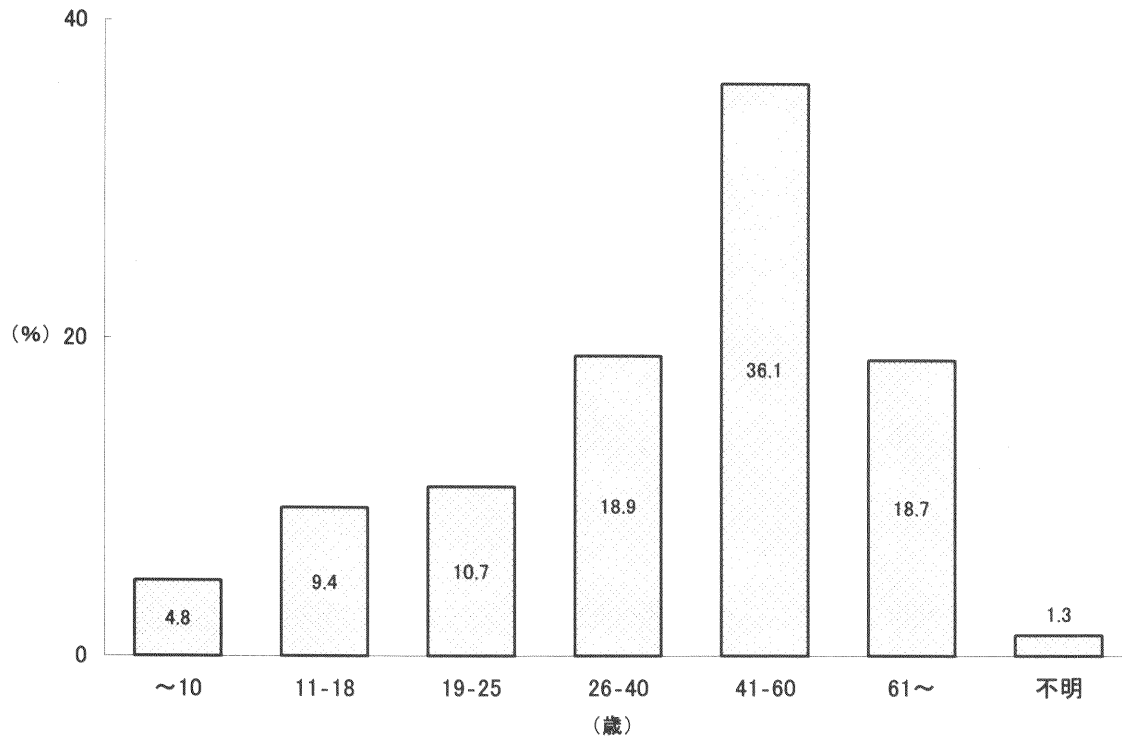


図4 年齢構成

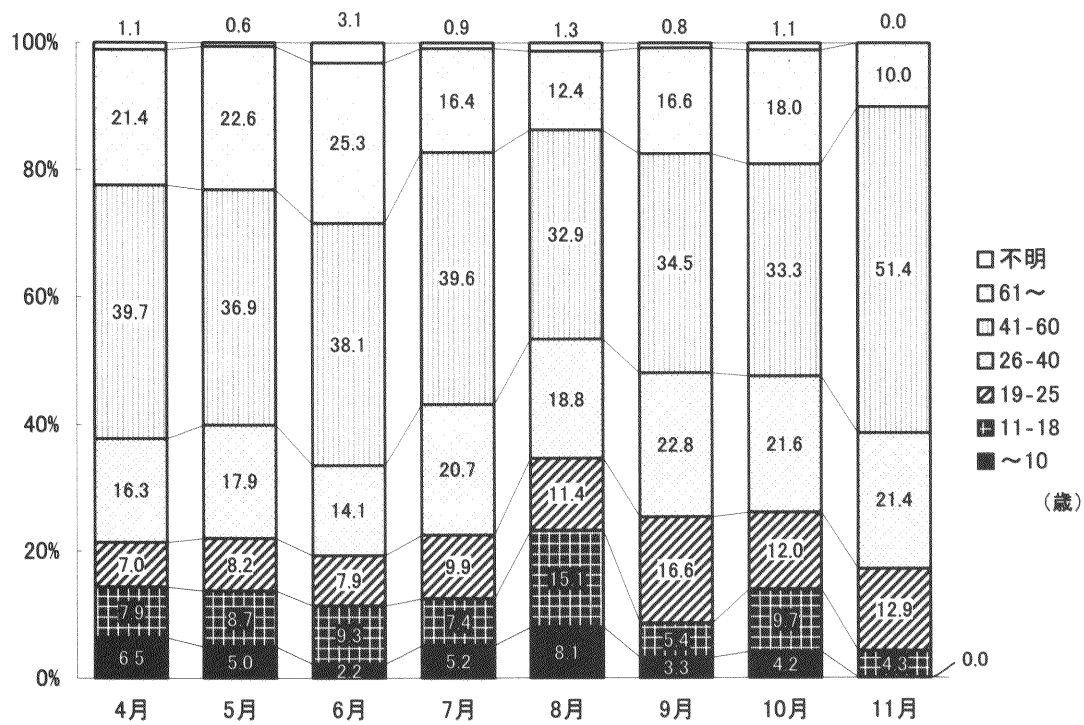


図5 月別年齢構成

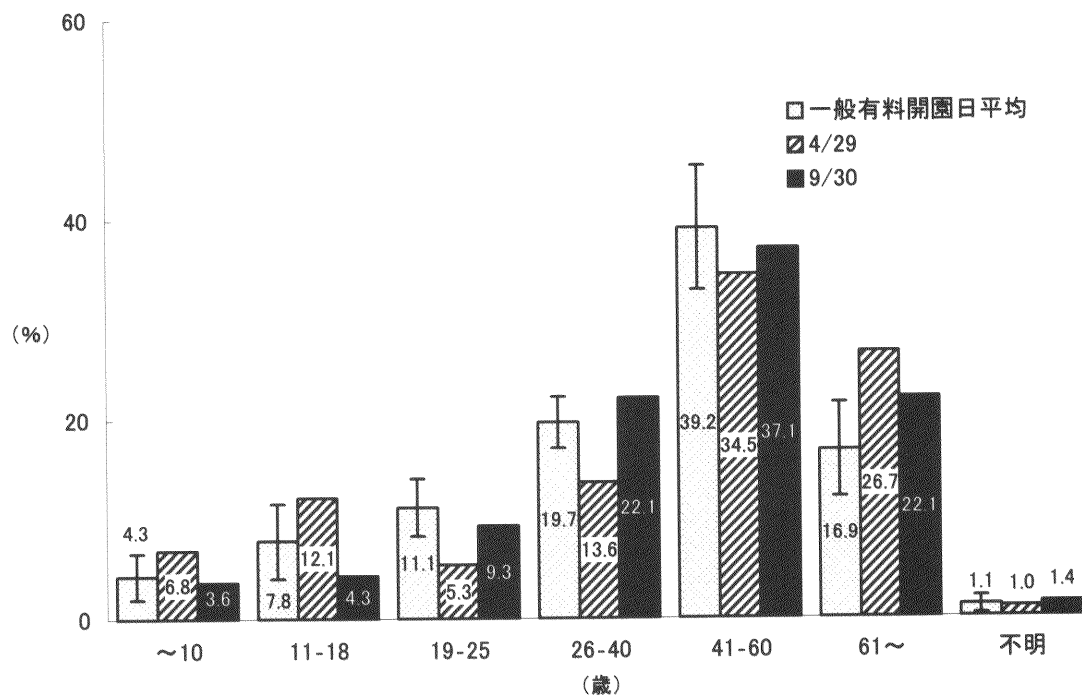


図6 無料開園日における年齢構成

注：一般有料開園日平均におけるバーは各月の変動範囲を表す。

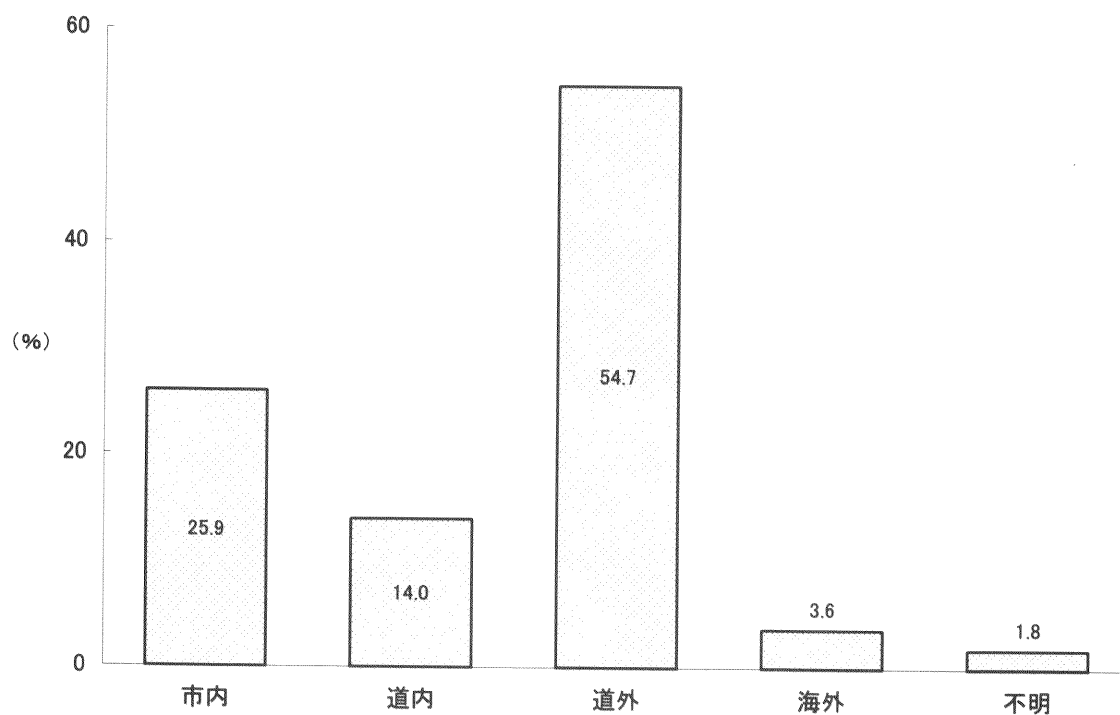


図7 居住地構成

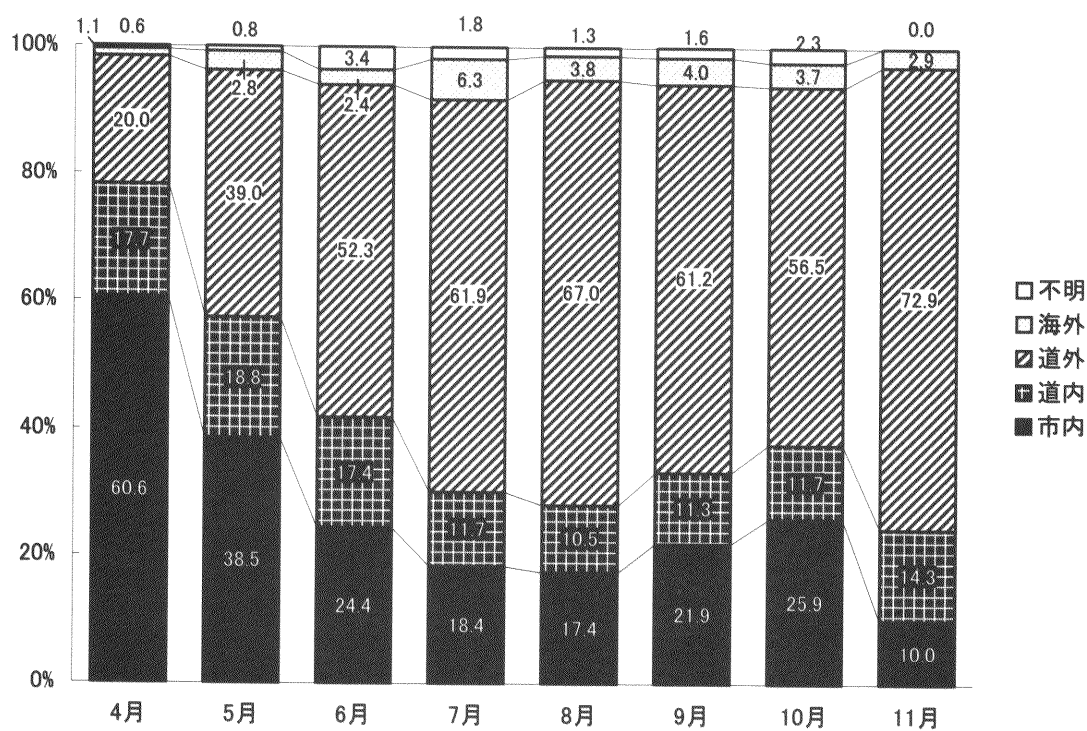


図8 月別居住地構成

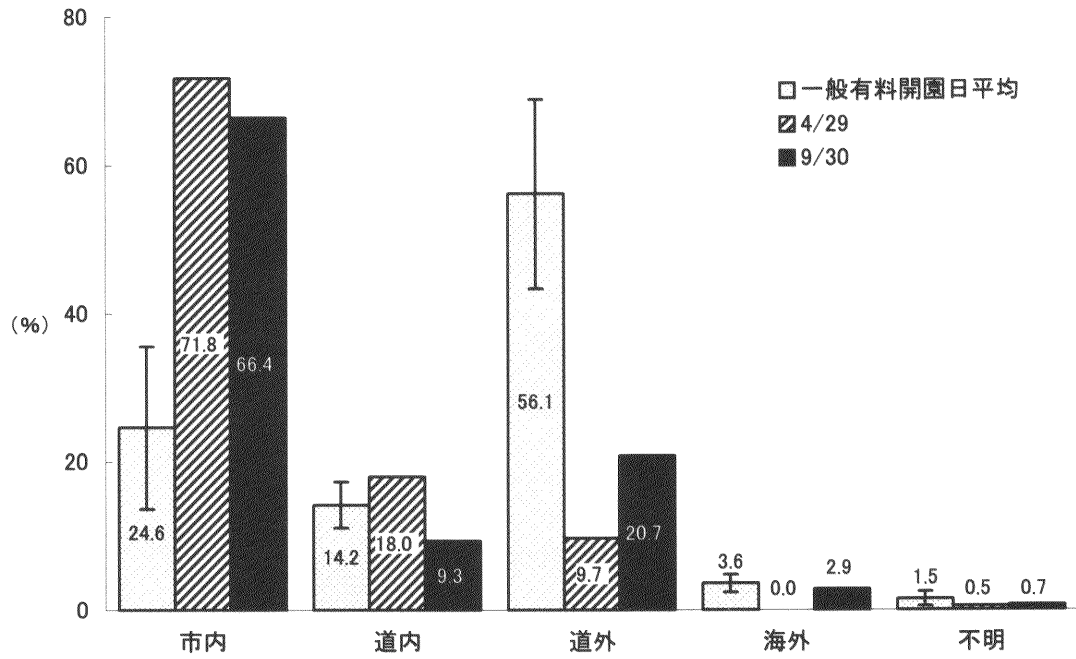


図9 無料開園日における居住地構成

注：一般有料開園日平均におけるバーは各月の変動範囲を表す。

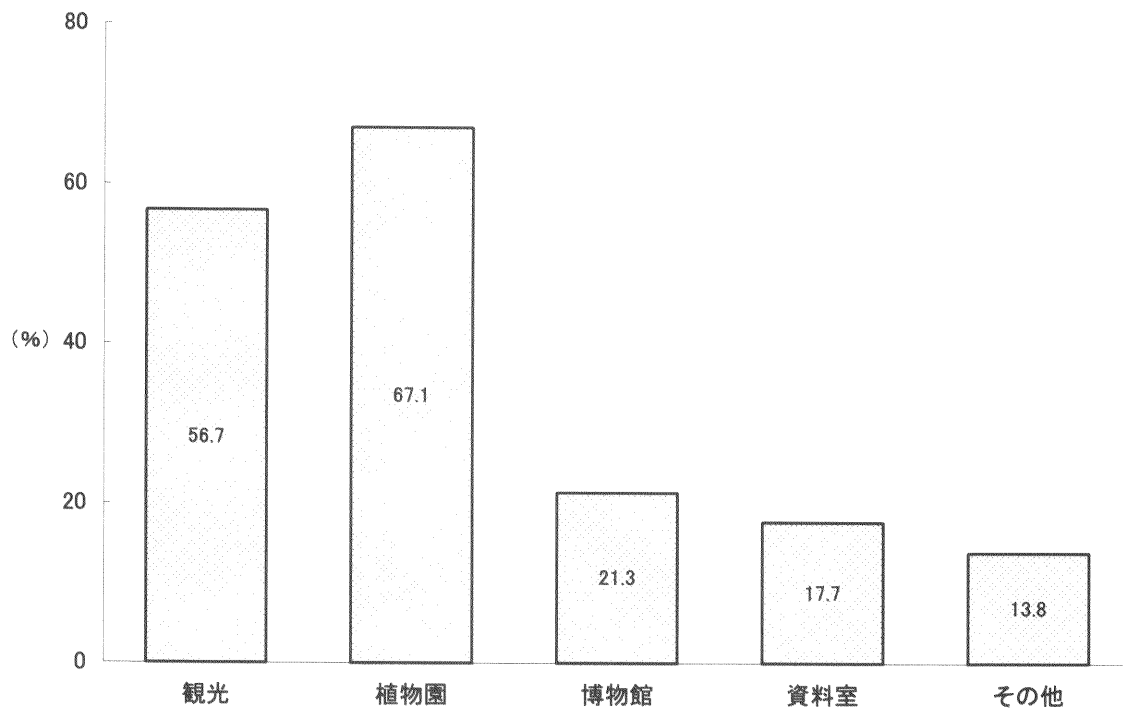


図10 来園目的

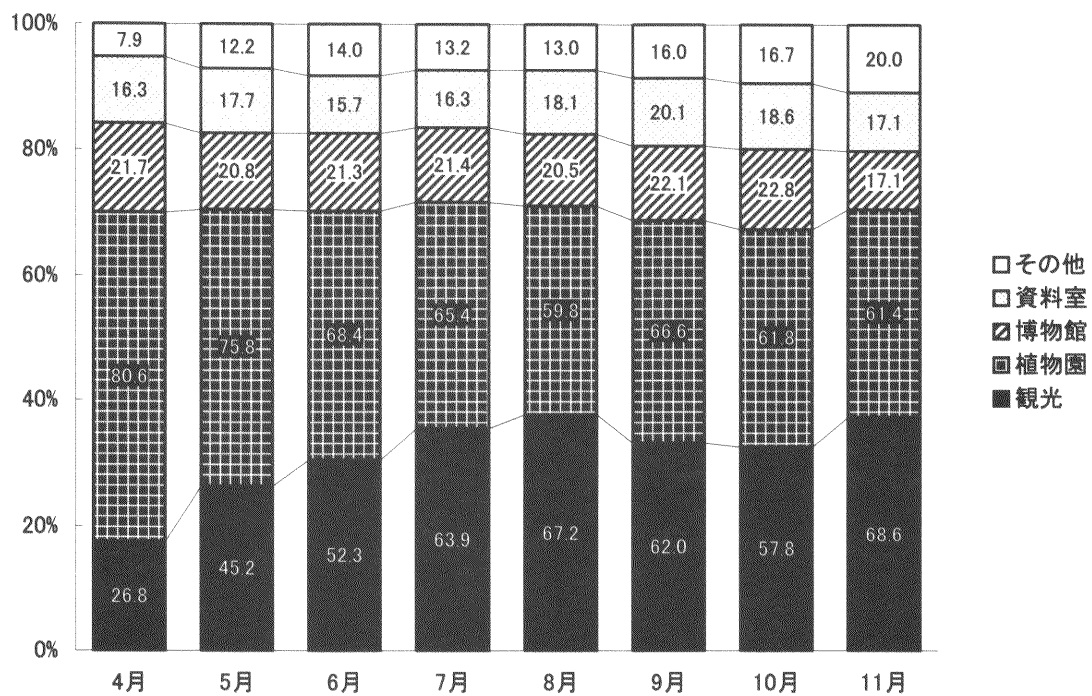


図11 月別来園目的

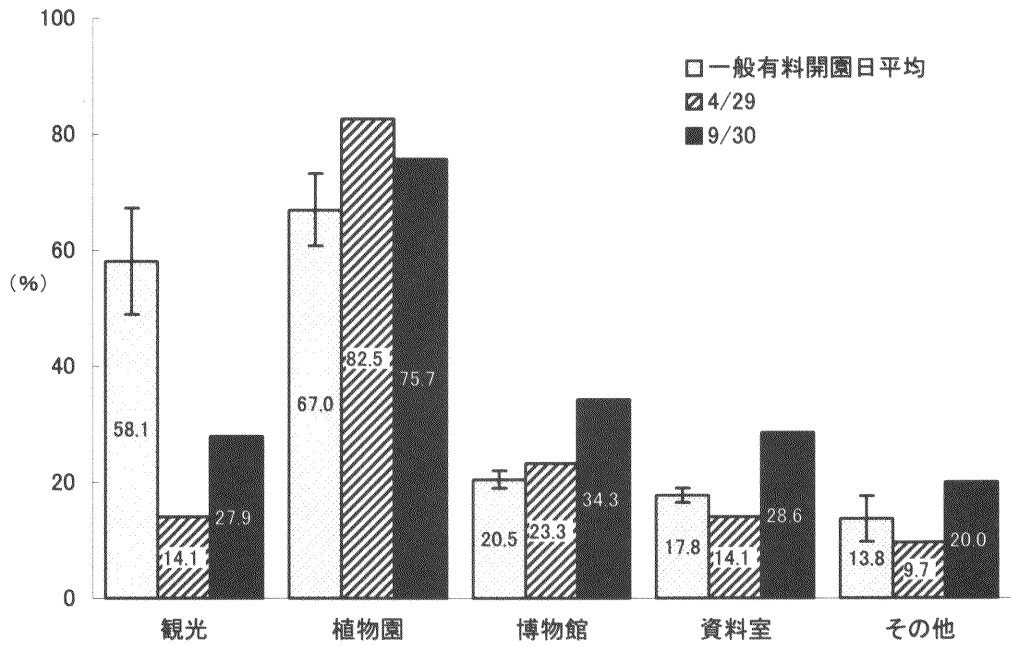


図12 無料開園日における来園目的

注：一般有料開園日平均におけるバーは各月の変動範囲を表す。

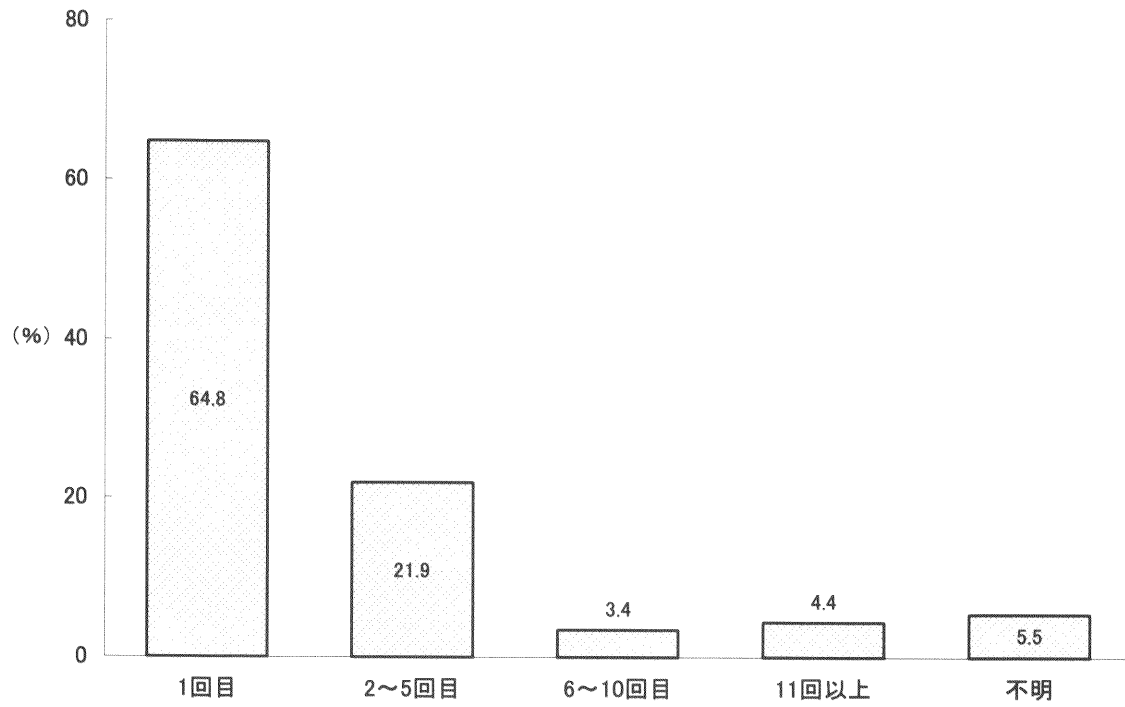


図13 来園回数

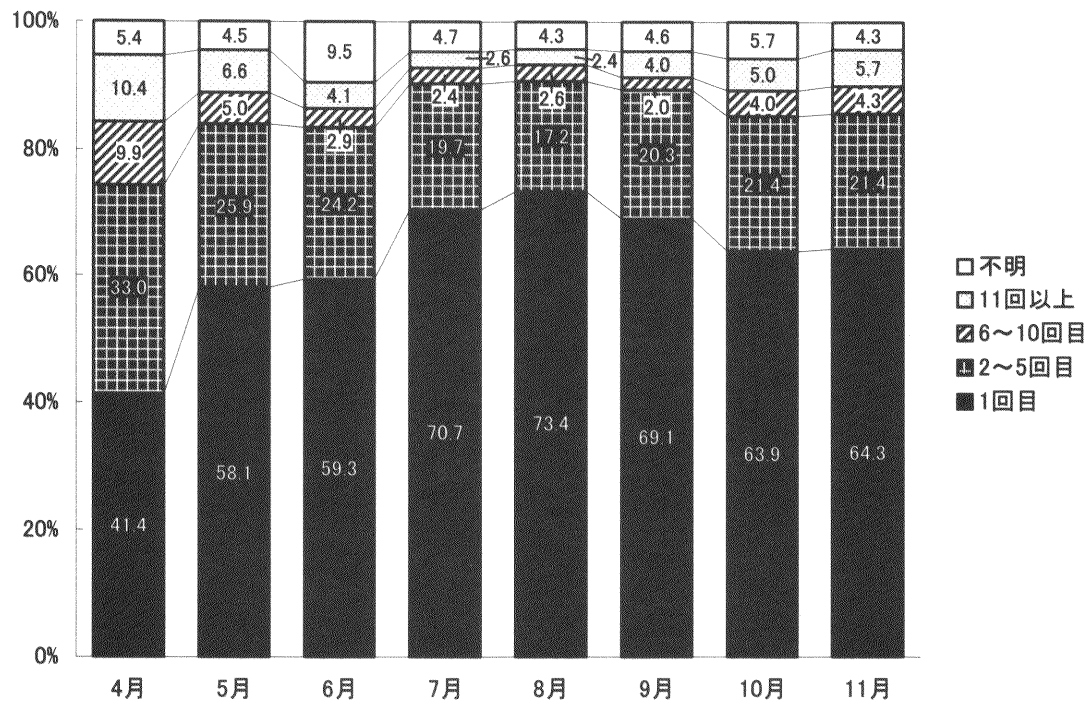


図14 月別来園回数

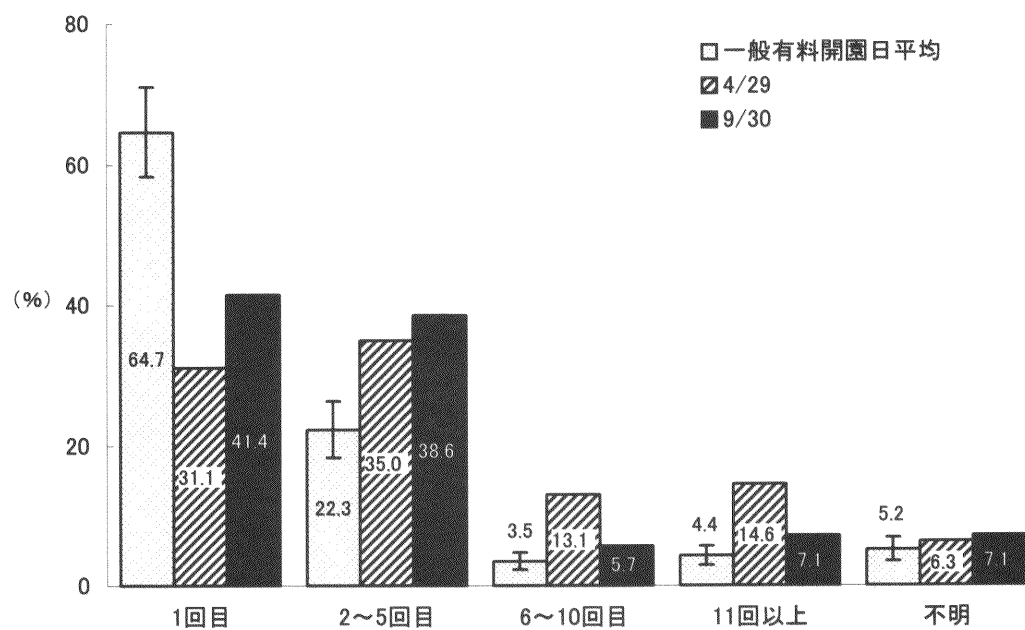


図15 無料開園日における来園回数

注：一般有料開園日平均におけるバーは各月の変動範囲を表す。

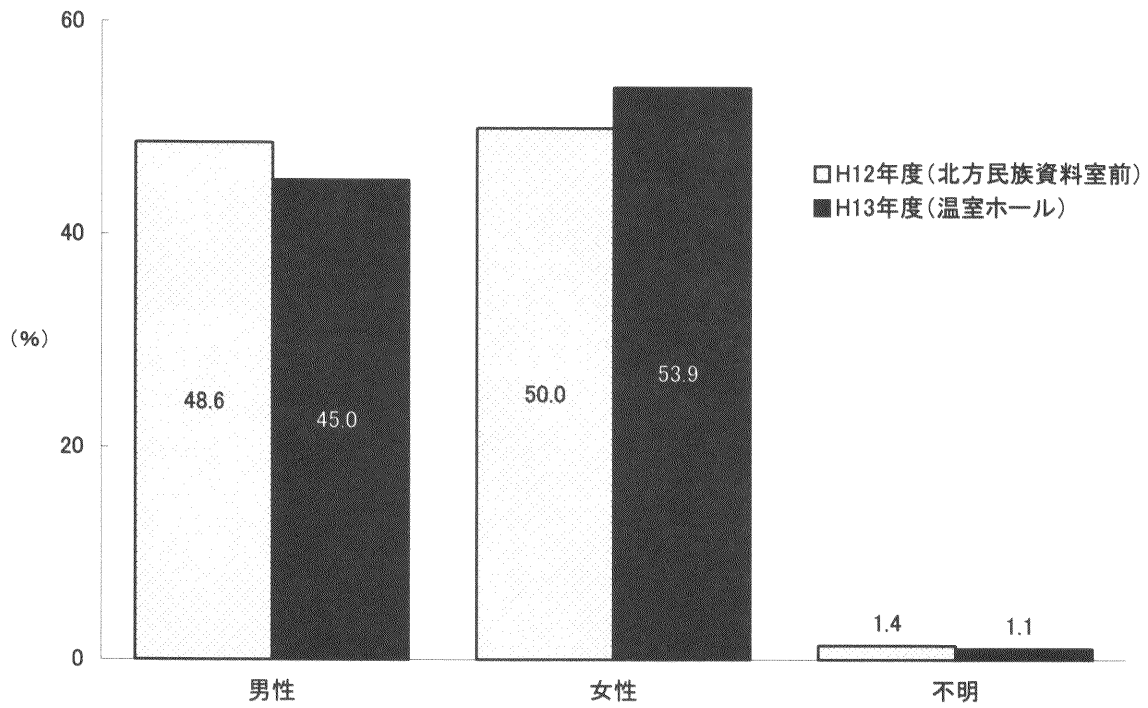


図16 年度別男女比

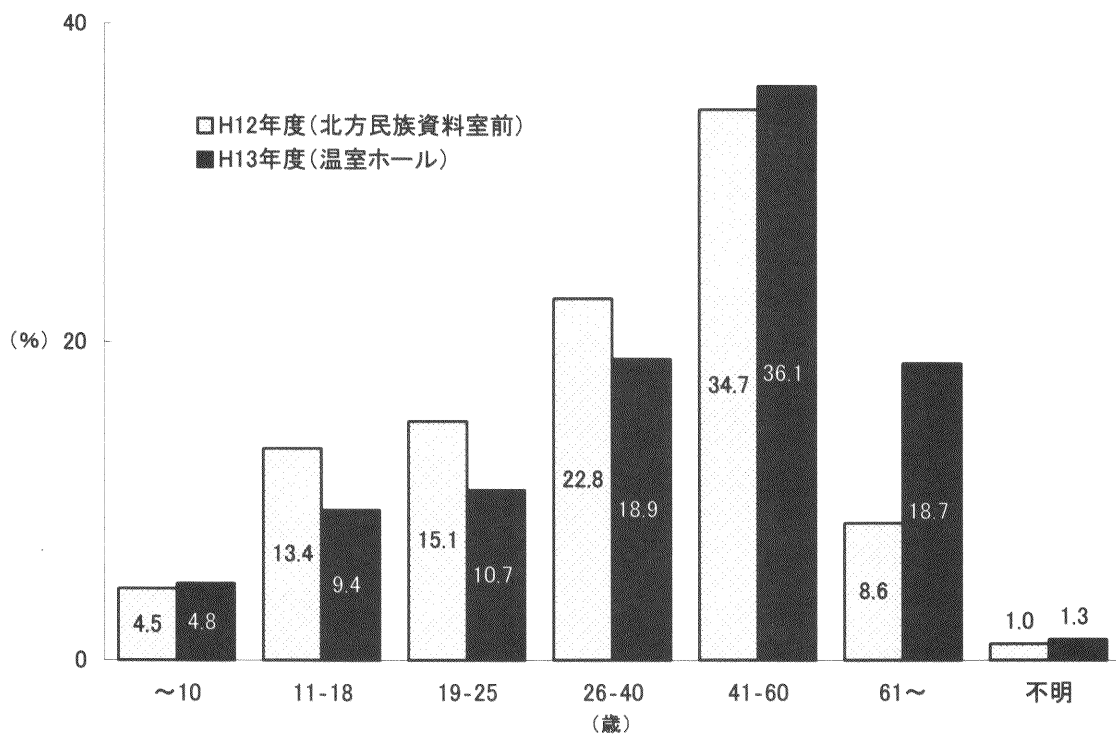


図17 年度別年齢構成

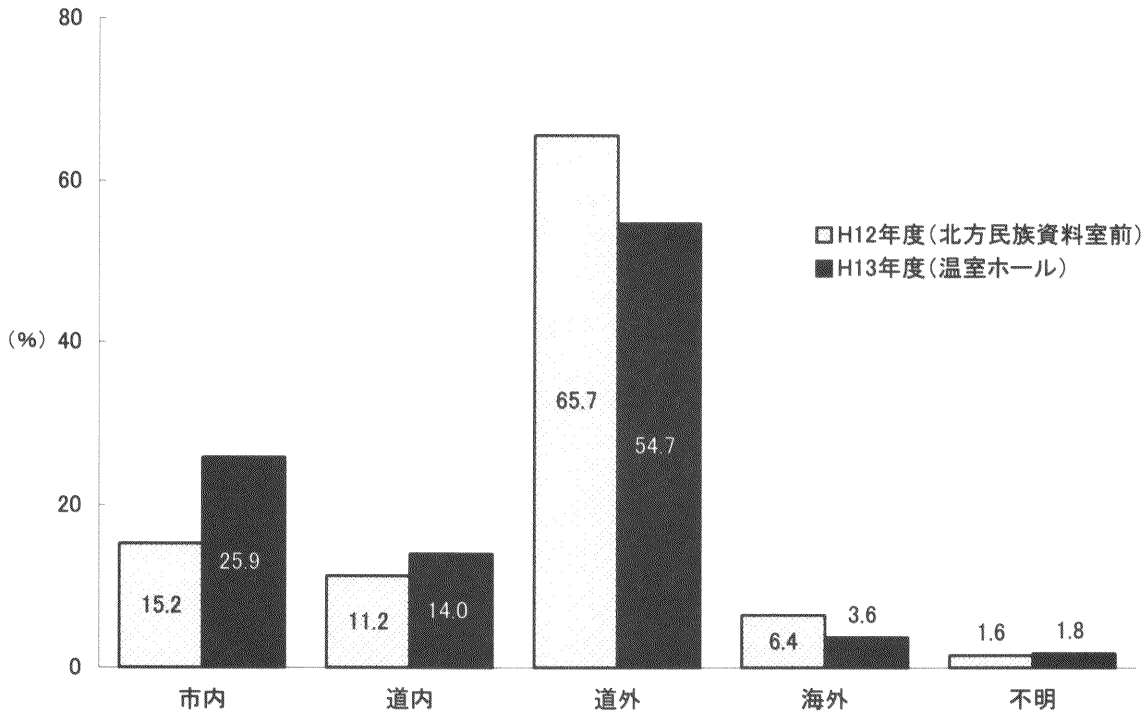


図18 年度別居住地構成

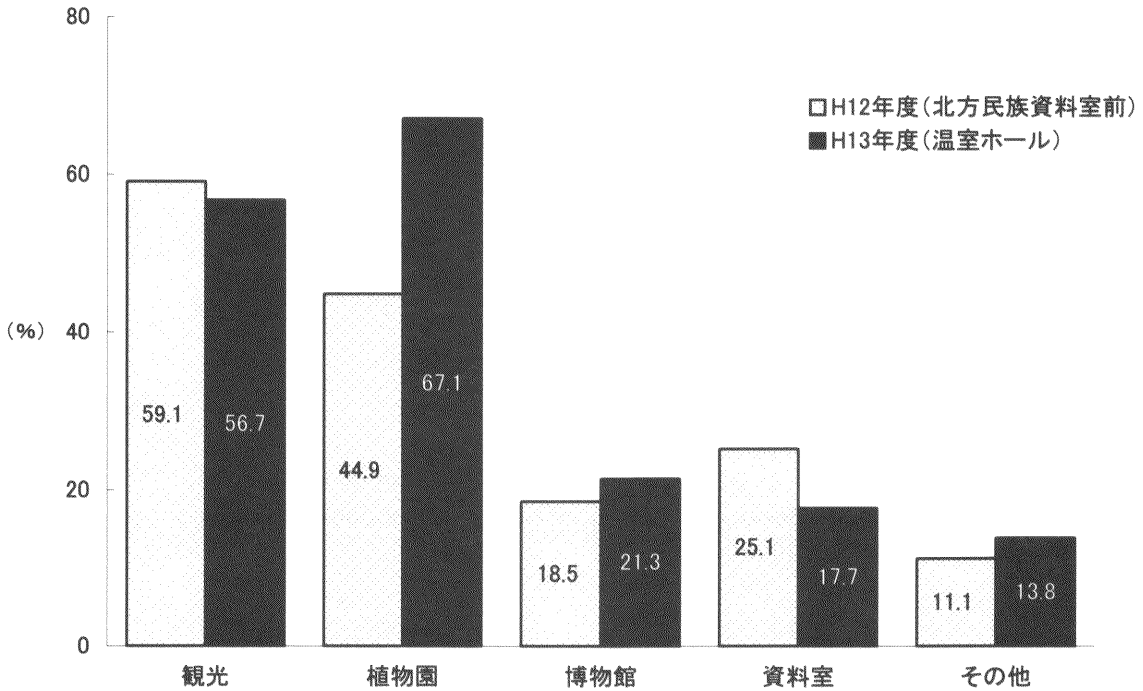


図19 年度別来園目的

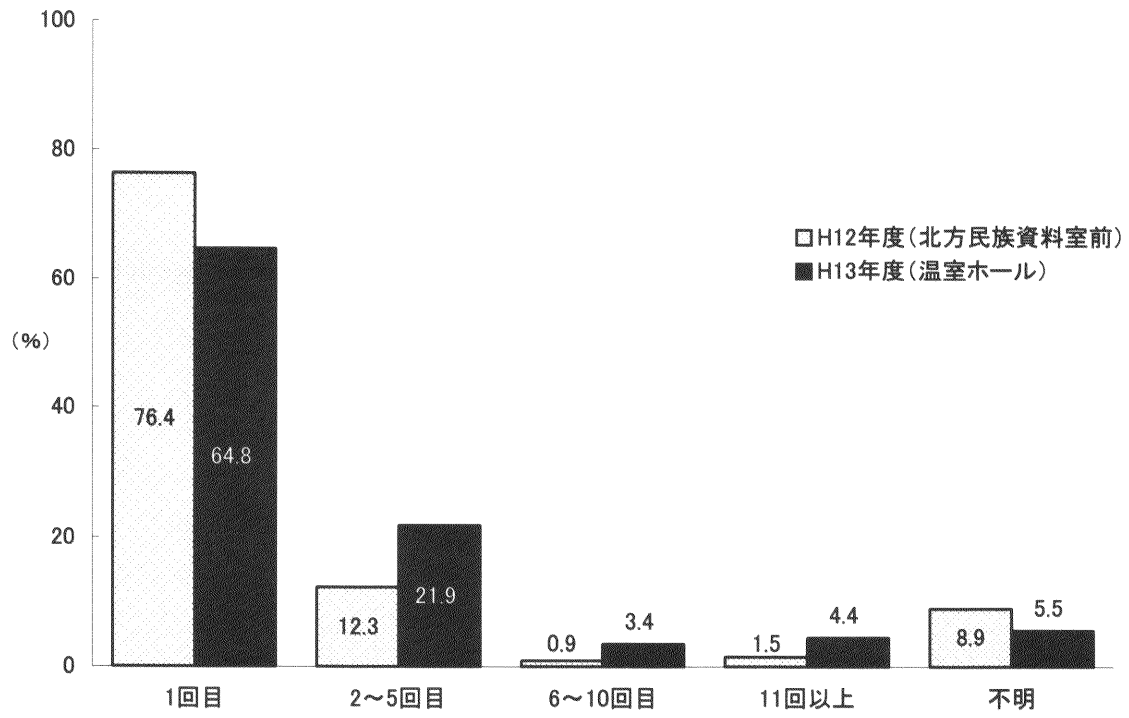


図20 年度別来園回数